

## 日本企業の中国進出に係わる問題点 (1)

谷 光 太 郎

### 目 次

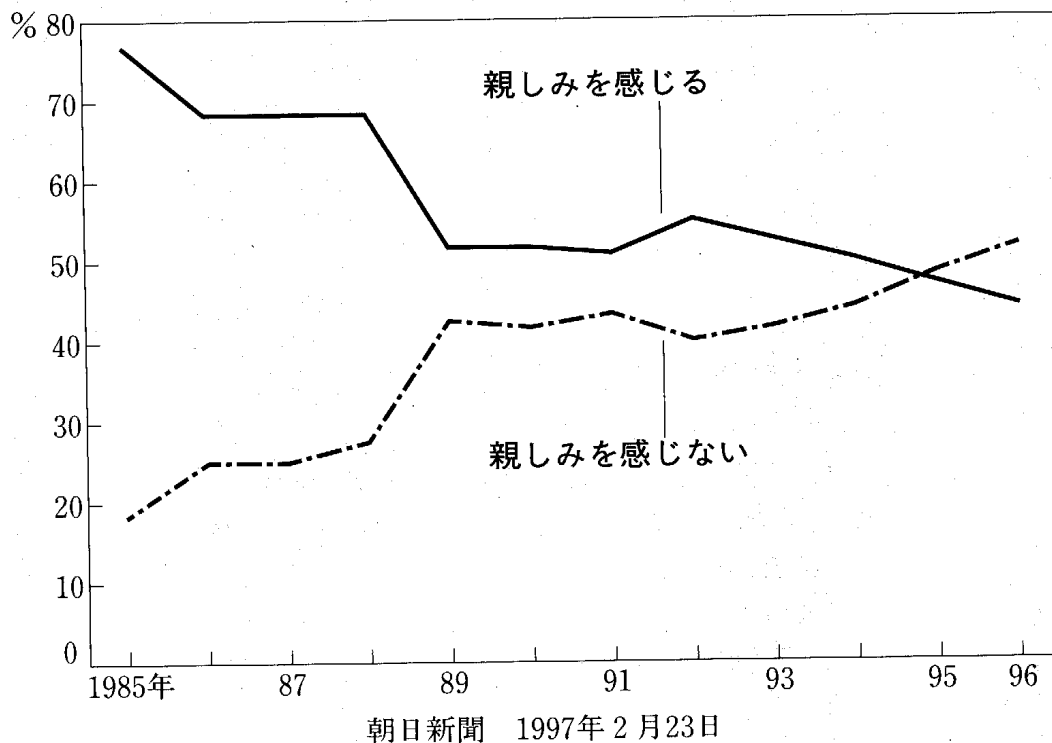
- (一) はじめに
- (二) なぜ中国進出が失敗するのか
  - (1) 日本のマスコミ報道の問題点
  - (2) マスコミの中国礼讃報道に迷わなかった人々
  - (3) 日本人は中国の伝統的思考, 風習をあまりにも知らない
- (三) 日本人と中国人の相違
- (四) 中国の政治体制の特色
- (五) 備考 中国・支那の呼称について

### (一) はじめに

総理府による「外交に関する世論調査」の1996年版が1997年2月に発表された。1996年10月に全国の成人三千人を対象に面接で調査したもので、回収率は70.2%であった。この中で、中国関係は、「㊤親しみを感じる」と答えた者は45%、「㊦親しみを感じない」と答えた者が50%である。(図1-1参照)

1985年には④は80%近く、⑤は20%以下であった。これが、その後の10年間で④は大体毎年のように下がり、それに対応して⑤は毎年上っていった。(図1-1参照)

図1-1 中国への親近感の推移



外務省中国課は「1996年の中国の核実験や尖閣諸島領有問題が原因だろう」と説明している<sup>1)</sup>が、これだけが原因とすれば、過去10年間の毎年のような④の低下傾向の説明はできない。

もちろん、例によって例の如き中国政府の「悪いことは全て外国のせい。良いことは全て自国が原因」式の発言や、「己のみ清し」<sup>おのれ</sup>的言動、あるいは執拗で威丈高な日本糾弾の姿勢に、多くの無名の日本人が反発していることは勿論であろうが、中国政府のこのような態度は何も今だけの話ではない。中華人民共和国が成立した1949年以降(明、清の時代からといっても良いが)、中国政府の態度は同じようなものだった。

同様の状況下で1985年には④が80%近くもあったのである。

1) 朝日新聞 1997年2月23日「親しみ感じぬ、対中国、初めて5割超す」

筆者はこの原因を、中国との交流の増大化によって、従来からの日本マスコミによる中国礼讃戦略から生じていた中国の仮像が崩れていったことが原因の一つだと思う。マスコミが口を極めて礼讃していた「文化大革命」が実は毛沢東による熾烈、野蛮な権力奪回闘争であったことが肝心の中国政府要人から明らかにされた。

マスコミや一部学者の礼讃の的であった社会主義体制(例えば「人民公社」や「国営企業」)が実は問題の多い体制であったことが、中国政府自ら告白せざるを得なくなった。同様に、中国政府の役人や一般庶民が滅私奉公的廉潔な人々で、青少年達の「目が輝いている」式の報道がいかにもデタラメだったかは、中国政府の発表による役人の「貧官汚吏」ぶりや、庶民の金銭への極めて強い執着ぶりで、化けの皮がはがされてきた。

人間は自分の利害得失の生々しい体験によって事実を知ることが多い。印刷物から得る感覚は蜃気楼を見るようなものである。

中国の解放化により、多くの企業が「日中友好」などという綺麗事ではなく、利益を求めて進出した。そうしてその殆どは失敗し、大損を蒙って、日本人の感覚からすれば悪辣な中国式のやり方に憤慨しつつ撤退している。

このような実情は、新聞紙上には書かれないが、波紋が広がるように日本人は知りつつある。

このことが日本人が急激に「中国に親しみを感じない」態度にさせている大きな原因ではなかろうかと筆者は考える<sup>2)</sup>

中国が近代化するという新聞報道に踊らされて、十分なシナの歴史や民族性を研究することなく多くの日本企業が中国に進出した。

日本からは少なくとも一万五千を超える企業が中国に進出し、「合弁」や「単独出資」という形で中国の経済活動に参加している。

こうした中国での経済活動に参加した日本企業の担当者達は、いずれも手ひどい経験や厳しい現実にくり返し直面しているのが現状である。この一万五千を超える企業のうち、少なくとも経済的に採算がとれ、出資に見

2) 「激震東洋事情」 深田祐介、小学館、1998年 p.201。

合った配当を確保しているケースは1%にも満たない<sup>3)</sup>

圧倒的多数の企業は進むことも退くこともできない「進退窮った」状態のままで放置されている<sup>4)</sup>

日本企業の中国進出は大部分「失敗」に終わった。

中国への投資として日本企業の設立した現地合弁企業の多くは、全く採算の取れない「赤字操業」に追い込まれている。そうした実態を伝えるべき日本の報道機関は、日中記者交換協定の制約を受けて、全く取り上げようとしないのが現状である。日本国民の圧倒的多数は中国経済の実態についても、また中国に進出した日本企業の実績についても、正確な情報も判断も捨てないでいる<sup>5)</sup>。しかし、多くの関係者の口に戸を立てることはできない。関係者の口を通して、徐々に真実を日本人も知るようになってきている。

中国にとってマイナスになる報道、あるいは好ましくない行動をする記者に対して、中国側は入国の権利を認めない。産経新聞の記者は中国政府の好むような記事を書かない、ということで長らく入国の許可がおりず、支局開設ができなかった。

これは1977年に結ばれた「日中記者交換協定」によって、中国側が日本人記者の入国の権限を握っているのが原因といわれている。日本側も中国人記者の入国許可権限を持っているが、日本には報道の自由があり、制約するようなことはやっていない。

日本のマスコミは北京支局が閉鎖されては困るということで、中国に阿<sup>おも</sup>た記事とか、中国政府の都合のいい記事を書く。

日本の外務省も、中国側の主張に気兼ねし、日本のマスコミの自由な報道を抑えるような行動をすると指摘する人もいる<sup>6)</sup>

3) 「天怒—天の怒り—(上)」 陳放, 監修・長谷川慶太郎, 構成・青木隆, KK, リベロ, 1998年 pp.441-442。

4) 「アジアの悲劇」長谷川慶太郎, 東洋経済新報社, 1998年 pp.101-102。

5) *ibid.*, pp.15-16。

6) 「アジア大転換と日本」長谷川慶太郎, 光文社, 1997年, pp.82-87。

日本のマスコミが真実を伝えない態度をいかに続けようとも、真実はやがて白日の下にさらされるし、鄧小平によるいわゆる解放政策後多数の日本人が中国で生活するようになり、真実は彼らの口から伝わってくるようになった。

また、多くの中国人が日本にやってくるようになり、彼等の行動パターンを知る日本人も多くなった。

## (二) なぜ中国進出が失敗するのか

殆どの日本企業が中国に進出して失敗する原因の最大のものは、前述のような、「中国が近代化する」というマスコミが作った幻想にとらわれて、安易に進出したことが原因だろう<sup>1)</sup>。欧米の経済誌等は詳しく報道するのだが、日本のマスコミは中国の実態を殆ど書こうとしないし、中国政府が発表した数字さえも報道されることは少ない<sup>2)</sup>。

だから次のような実態を知らずに進出する。

(イ) 中国に進出する日本企業は年に1000社くらいあるが、撤退しているのも1000社くらい。日本の新聞は大きく報じないが、進出して痛い目に遭った日本企業は山ほどある<sup>3)</sup> (静岡県立大学, 高木桂蔵教授)

### (ロ) 公私混同の無茶な要求

日産は中国との合併計画を撤退した。(日本経済新聞1996年11月15日付)

中国側から「生産したエンジンの半分は中国におろして、中国の手で海外に輸出させろ。工場とは関係のない病院や学校まで建設しろ」とかの要求があり、露骨なりべートも要求された<sup>4)</sup>。

1) 「アジアの悲劇」前出, pp.101-102。

2) 「大変貌」長谷川慶太郎, 徳間書店, 1997年, p.75。例外的なものもあるがこれは大体小さな記事, 例えば朝日新聞(夕) 1997年3月7日, 経済気象台「中国に投資するには」が一例。

3) 「激震東洋事情」前出, p.172。

4) *ibid.*, p.172.

トヨタが進出を図った時には、輸入税を入れると1台2000万円もする最高級車レクサスを要路の190人に配れと要求され腰がひけた。いきなり21億円のリベート要求である<sup>5)</sup>

(イ) 中国人相手に商売したら、普通の日本人なら確実に胃袋に穴があく。

中国貿易を始めた頃の日本商社は、3社くらい呼び出され、別々の部屋に入れられて、交渉させられた。そうして、「隣はこんな値段を出している。そんな値段じゃ二度と中国と商売できない」という。隣の部屋の日本商社には、「隣はこんな数字を出した。競争に敗れていいのか。お宅の社長に電話しようか」こういう調子でやる。「信義を尽して、長い目での利益」といった考えは全くない。その場、その場の権謀術数で目の利益をふんだくろうとする。商社員は悔しさに手がブルブル震えたという<sup>6)</sup>

荒っぽい略奪のやり方の典型がヤオハン倒産の1件。投資させるだけ投資させておいて、調子が悪くなると、あっさり見殺しにする。

中国進出のパイオニアを大切にしないと、後に続く人がなくなることを知らない<sup>7)</sup>

(ニ) ひったくれる時に、ひったくったら、後は野となれ、山となれ式のやり方。

中国に進出すると次のように3度盗まれることを覚悟せねばならないと中国問題に詳しい深田祐介はいう。

- ① 関連の役所の認可をもらうのに猛烈なりべートを要求される。
- ② ノウハウが盗まれる。江蘇省昆山に進出したスキー手袋メーカーのスワニー（香川県）の一例。ノウハウを盗み取ったら契約更新の時、実にあっさりと、「市の中心部にハイテク企業に来てもらうので、郊外へ出て下さい」とか「日本へお帰り下さい」とかいわれた。進出の時には、下にも置かぬ丁重さで進出を要望され、毎年市から外貨獲得先

5) *ibid.*, p.195.

6) *ibid.*, p.210.

7) *ibid.*, p.187「ヤオハン無邪気な失敗」加藤鉦，日本経済新聞社，1997年参照。

進企業されていたこの企業にしてである<sup>8)</sup> ノウハウを身につけた途端、「合併は解消しましょう」となる。

- ③ 本当の盗難。これには頭を抱えている所が多い。新潟県燕市の某食器メーカーは広東省に進出した。製品のナイフやフォークが毎日女子工員に盗まれる。出口にX線透視機をつけたところ、今度はその監視係が買収されて、盗まれ放題。結局、盗難で利益が出ず撤退してしまった<sup>9)</sup>

(ホ) 中国での経済犯罪のものすごい<sup>10)</sup>

脱税、賄賂、収賄、二重帳簿、偽物の横行。激増する犯罪の原因の一つは、「公私」の区別が曖昧な社会主義独特の感覚にあるとする人もいるが、後述するように、筆者は中国の伝統的風習によるものと考える。

国有財産の私物化や流用は日常茶飯事である。

日本企業が中国に進出して惨憺たる体験を余儀なくされている原因の一つは、日本のマスコミにより作られた「中国近代化の幻想」にまどわされて<sup>11)</sup>進出したことであり、日本人が中国を余りにも知らなさ過ぎることも大きな原因である。即ち、一面的なマスコミ報道からの誤解と、進出者の中国への無知である。

### (1) 日本のマスコミ報道の問題点

マスコミ報道の偏向に我々はどうか対処して、正しい中国認識を得ることができるか。

これに関して、我々は身近な教訓を持っている。1958年から始まった毛

8) 「激震東洋事情」前出, p.195。「中国投資はなぜ失敗するか」梶田幸雄, 園田茂人, 亜紀書房, 1996年 pp.133-134。

9) 「激震東洋事情」前出, p.88。

10) ibid., p.171。偽物の横行については日本経済新聞 1998年5月4日「『偽物大国』中国の悩み」参照。

11) 「情報力」長谷川慶太郎, サンマーク出版 1997年, p.179。

沢東の大躍進政策と1966年に起った文化大革命に関するマスコミ報道である。マスコミはこの二つの運動に関して讚美の記事で埋めた。

しかし、これらマスコミの動きを疑問視し、正しい認識を持っていた人々もいた。

1958年、毛沢東主導による大躍進政策が始まった。日本の新聞は絶讚に近い報道をした。大躍進政策の柱は「土法炉」と「深耕密植」である<sup>12)</sup>

土法炉は近代的製鉄業がなかなか発展しない事を怒った毛沢東が前近代的な小さな炉を全国隅々の村々にまで築かせ、鉄鋼の生産高を画期的に増やそうとしたものである。

最盛期には70万基の土法炉が築かれ、動員された農民は5000万人に及んだ。

近代産業に使用される鉄鋼の製造には高い技術が必要とされる。日本では室町時代や江戸時代にでも、刀剣や農具に使用される鉄（砂鉄から作った）の製造には専門家集団が担当している。素人の農民が農家の庭先に炉を作って、鉄鉱石やコークスが仮に豊富に配給されても、良質の鋼ができることなど土台無理である。

深耕密植も、少しでも農業のイロハを知る者にとって話にならぬことは明瞭である。

密植すれば1年目はいいとしても、土地が直ちに駄目となって、翌年からは収穫ができなくなる。

工業にしろ、農業にしろ、技術に王道はない。地道な技術修得と改良の積み重ねしかない。かけ声やスローガンだけでは何にもならぬ。自国産業の遅れと先進国との差が益々開くことに苛立つ産業後進国のリーダーはえてして、地味な技術の積み重ねを嫌って、かけ声やスローガンや、担当役所の創設や法律制定で対処しようとする。

技術は鉛筆一本でどうにも書ける作文とは異なる。技術のイロハを知ら

12) 「朝日新聞血風録」稲垣武，文春文庫，1996年，pp.51-54。



ぬ新聞記者は、土法炉と深耕密植を褒め讃える記事を書いた。

日本の新聞報道が中国に関していかに的が外れていたか、を知るには、今では評価のはっきりしている文化大革命をケース・スタディにすれば明らかである。

1966年、文化大革命が起った時、日本の大新聞は、人間の心を変えようとする、人類始まって以来の大快挙だと讃めたたえた<sup>13)</sup>

ごく少数の人々は、彭真北京市長の北京グループと鄧小平総書記の党中央との内部闘争と見たようだが、これは例外だった。当時の中国を訪れた日本の代表団なども毛沢東様々だった。しかし、幕が下りて見ると、鄧小平総書記やその親玉の劉少奇国家主席まで追放されてしまった。そうして、「毛沢東主席の忠実なる同志にして揺ぎなき後継者」といわれた林彪国防相が毛沢東とともに天安門上に並んだ。日本のどの新聞も次は林彪の時代だとはやした。林彪がソ連に逃亡しようとして、モンゴル上空で飛行機事故に遭って死んだ時、この事実をどうしても書かなかった日本の代表的新聞があった<sup>14)</sup>毛沢東が上海の労働者出身の30歳代の王洪文を政治局員に選抜した時、王が毛沢東の後継者だと日本の多くの新聞は書いた。

毛沢東が死んで、華国鋒が党主席と国家主席に就任すると、次は華国鋒の時代になると例によって書く。

1989年の天安門事件の前後は、中国のいわゆる民主化への「希望的観測」が日本の新聞の紙面に溢れた。ことほど左様に、日本の新聞の中国関連の予測は全く当らない。

日本のいわゆる進歩的文化人や進歩主義を売り物にした新聞が「蠅のいない中国」の宣伝をしたり、文化大革命時の強制労働や地方追放を美化して書きまくっていたため、多くの日本人は無邪気にこれを信じた<sup>15)</sup>

13) 「情報力」前出, p.196.

14) 「朝日新聞血風録」前出 pp.21-25.

15) 「騙してもまだまだ騙せる日本人—君は中国人を知らなさすぎる」邱永漢, 実業之日本社, 1998年, p.31.

当時、邱永漢は香港に住んでいて、隣の広東省での人民裁判では、子が親を告訴したり、貧しい親戚が金持ちの親戚を誣告するのをいやという程耳にしていたので、日本人の騙されやすさに驚いていたという<sup>16)</sup>

しかし、大躍進政策や文化大革命を正しく理解していた人々もいた。朝日新聞記者の稲垣武は「科学史」を京大で学んでいたこともあり、技術の常識から考えられぬ土炉法や、深耕密植農業に素朴な疑問を持った<sup>17)</sup>

文化大革命についても、シナの政治史に詳しい人々は、シナの古代からよくある権力闘争であると看破していた。

## (2) マスコミの中国礼讃報道に迷わなかった人々

毛沢東は明の太祖朱元璋に出自や、権力取得のやり方、革命への経緯が実によく似ていることを指摘したのは安岡正篤だった。シナの歴史に詳しい安岡は、毛沢東を朱元璋と対比して、中国の現状の分析を行った。安岡はいう。朱も毛も革命の同志でこれとは思う者を次々と抹殺した。しかし、ああいう無理な粛清を重ねると、人材が払底して内政が混乱・不安に陥るのは当然である<sup>18)</sup>

同様のことは堺屋太一も考え、中国政界の予想を行っている<sup>19)</sup>

朱元璋は安徽省の貧農の出身。元朝末期の動乱期に白蓮教系の革命団体に入った。毛沢東は湖南省の農民の出。若い日に、中国共産党に入党した。朱はこの小団体にあきたらず、自ら革命軍を組織し、安徽省北部から南京(当時の建康)まで200キロの「長征」を行った。南京を占領した朱は長い内戦の後、シナ大陸の南半分を統一すると北伐の軍を送り北京にいたモンゴル人の外国勢力を排除し、「明」王朝を樹立した。

毛も中国大陸各地の「長征」を行ない、延安に共産党政権下の国を作り、やがて各地で蒋介石の国民党軍を破って、毛「王朝」を樹立した。

16) *ibid.*, p.31.

17) 「朝日新聞血風録」前出, pp.51-54.

18) 「人物を修める」安岡正篤, 竹井出版, 1986年, p.157.

19) 「次はこうなる」堺屋太一, 講談社, 1997年, pp.205-210.

文化大革命が始まった1966年頃、堺屋は、「これは劉少奇ら政府、共産党の首脳部に及ぶ大事件になるのではないか」と思った。紅衛兵と壁新聞が氾濫しだした頃、新聞や外務省は「鄧小平らと彭真らとの対立」といつていた。堺屋の予想は当たった。次に堺屋は林彪国防省の失脚も予想して、見事に当たった。堺屋は毛沢東と明の創建者朱元璋（太祖・洪武帝）の類似に気づいていた。

明王朝確立後、朱元璋は「一君万民」の思想と自力更生に徹した独裁政治を行った。

朱元璋は、権力の確立のため、(1) 文字の獄、(2) 故惟庸の獄、(3) 藍玉の獄という政治事件をリードしている。(1)は文学からの文人の弾圧。(2)は宰相の要職にあった実力者胡惟庸一派を反逆の容疑で一族一万五千人の処刑。(3)は(2)の事件に関して故惟庸を密告した將軍藍玉を明朝乗取りの陰謀を理由として逮捕し、一族郎党二万人を粛清した事件。

堺屋は(1)を文化大革命と類似していると考え、(2)から劉少奇失脚、(3)から林彪失脚を予想したのである<sup>20)</sup>

文化大革命の最中、宮崎市定京大教授は「毛主席語録」の中にある「反対自由主義」という毛の論文を解説した<sup>21)</sup>この中で宮崎は毛のいう自由主義は日本人のいう自由ではなく放逸の意味で使用されている。革命のみ人生の目的として追求し続けてきた毛沢東には真の自由主義の良さが全然分らないのではないかと指摘し、実に正確な予測を次のようにしている。

「本当の自由主義のよさを全く知らないか、或いは故意に評価しないで、世の中にはただ良い共産主義を放埒な自由主義との対立があるばかりで、いわゆる資本主義国家は即ち自由主義国だとするなら、これは将来毛沢東主義にとって却って大きな論理上の弱点になりはしないだろうか。すなわち、外界に目をふさいだ毛沢東主義は鎖国状態を続ける限りはどうか維

20) 「明日を読む」堺屋太一、朝日新聞社、1997年、pp.215-217。

21) 「宮崎市定全集別巻 政治論集」岩波書店、1993年、pp.279-280。

持できて、ひとたび外国との交流が開けると忽ち瓦解してしまう虞はないか」

また、「毛主席語録が将来悪用される心配はないかと案じられる」とも推測している。この推測が正しかったことはその後の周知の事実からはっきりしている。

また次のような指摘もしている<sup>22)</sup>

「中国の古い慣習、或いは仲間うちでは道德とさえ見做<sup>みな</sup>されていたことは、共産党の天下となっても驟<sup>にわ</sup>かには改まらないであろう」

「しかしながら、われわれの長い中国の歴史を見た目からすれば、それもこれもすべて歴史的な産物であったのだ。……こういうことは日本の学者は言いたがらぬ者が多いが…問題は果して今のような方法で、長い伝統的な習慣を根絶できるかどうかである」

「毛沢東の言葉は従来<sup>にわ</sup>の皇帝や、政治の責任者たる大臣の言ってきたことと、実はあまり内容の変らぬものなのである」

「中国においては民国成立以後、国内の分裂と共に政治に対抗する勢力の勃興する気運を見せたのであるが、人民共和国の出現によって、すべてが政治に一元化され、この点においては旧皇帝政治の復活を思わせるものがある。新しい権力者が、旧官場の習気を復活させる危険は十分感ぜられるのである。このように考えると、今度の文化大革命の勃発は、むしろ歴史的な必然性であったとも言えよう」

「毛主席語録を読ませるような教育方法が、果してどこまで有効であろうか。長い人類の歴史を見てきた私の目からすれば、遺憾ながら些か悲観的とならざるを得ない」

「少し早まった言い方かも知れぬが、中国の文化大革命は、共産主義運動がもつ一つの限界を示すものではあるまいか。先ず破壊せよ、そのあとに良いものが出来る、と教えるが、その良いものはなかなか出てこない。

22) *ibid.*, pp. 286-290.

これは理由のあることで、各国はそれぞれ数千年の過去を背負っているから、一朝一夕にして従来の伝統から抜けきれないのは当然すぎるほど当然なのだ。……中国にも相も変わらず皇帝政治の遺制がつきまとう。どうやら毛沢東には清朝の独裁君主雍正帝の倣いがあるようだ。もしそんなに容易に過去が払拭されて、ぜんぜん新しい世界が即席に誕生できるものならば、歴史学などを研究する馬鹿は世の中にはいないはずだ」<sup>23)</sup>

シナの歴史に詳しい人々は文化大革命の持つ意味を、マスコミ論調にまどわされずに正しい理解をしていたことを示すために少し長い引用した。

大躍進政策の失敗を予想した朝日新聞の稲垣武は、京大時代技術史を勉強しており、「技術に王道がない」ことをよく知っていた。スローガンやかけ声で技術開発が急発展することなど思いもよらぬ事であり、地道な技術の積み重ねが技術発展をもたらす、という「常識」があった。この常識の眼で見れば、大躍進政策が、毛沢東のあせりからくる、うさん臭いものであることがすぐ分った。

文化大革命を正しく理解した、安岡、堺屋、宮崎といった人々は、シナの歴史に詳しい人々だった。人間の歴史は過去の歴史に繋がっている。宮崎の前述の言葉、「各国はそれぞれ数千年の過去を背負っているから、一朝一夕にして従来の伝統から抜けきれないのは当然すぎるほど当然なの」である。

これらの人々に共通している点は、その国の民族性とか国民性を深く研究した人とか、これを日常の体験で感得した人々である。

国民性とか民族性とかは、地理的環境、宗教的背景、異民族との対立、政治的伝統といったものによって何千年もの間に醸成されたもので一朝一夕で変わるものではない。それは個人の性格が幼年時に形成され、生涯ほとんど変わらないのと似ている。

23) 「宮崎市定全集(23)随筆(上)」岩波書店、1993年 pp.237-240 (「文化大革命の教訓」)。

シナのことを知るには、やはりシナの歴史とその民族性に詳しい碩学の考えを参考にすることが無難である。社会主義の色メガネで現代中国を見るシナの歴史や民族性に無知な学者の説を信じたり、新聞論調でのイメージによって中国に進出しては、えらい目に遭うことがこの10年間に頻発している。

毛沢東の下、社会主義体制になった途端に中国の人々の思考態度や、社会風習が一変すると考えたのはマスコミ界の軽薄な見方で、この考えが中国への認識の眼を曇らせた。

我々は大躍進政策報道の失敗から、技術の地道な積み重ねの大事さを、文化大革命報道のデタラメさから、シナの歴史、政治風土、民衆の思考態度を学んでおくことの重大さを知った。

日本人の対中国観を悪くする大きな原因は中国政府の中華思想的尊大な言動や、連日のように新聞・テレビで報道される不法入国者だろう。しかし、これは何も今に始まったことではないことを知っておく必要がある。

シナの伝統的思想ではシナ皇帝は単にシナの主権者であるばかりでなく、世界人類の共通の主権者であり、従って、外国の君主もシナ皇帝の臣下でなければならぬとする。だからシナの中央政府には朝貢国を司る役所はあるが対等な国と外交交渉を行う役所は歴代の王朝ではなかった。これができたのはようやく清末で日本でいえば明治の末である<sup>24)</sup>

幕末期、日本の一般的知識人の考えは、西洋列強の東アジア侵略には、黄色人種である日本と清国が共同して当るべきだ、ということであった。

しかし、清国の現状を沖縄貿易を通してよく知っていた薩摩藩主島津斉彬は、「清国も早く政事を改革し、軍備を整へ、日本と一致する時には、英、仏も恐るに足らずといへども、清国は日本を見ること属国の如く思ふ故、とても日本と一致は覚束なし。清国は一体高慢にして、国の広きを自慢し、我より上なしと云ふやうなる風俗なれば、日本と心を合はせること

24) 「宮崎市定全集(10)近代」岩波書店、1993年 p.29。

など思ひよらざることなるべし」といった<sup>25)</sup>

また、政治家だけでなく、シナの知識人も昔より日本を甚だ低く見ていることを宮崎は、「由来シナ読書人はシナ以外のアジアに対し殆ど関心を持たぬ」<sup>26)</sup>とか「日本をも朝鮮をも、如何なる意味において学ぼうとせず、その文献も読もうとしないこと」<sup>27)</sup>、「シナの学者が日本人の研究を引用しているのを出したがらぬこと」<sup>28)</sup>を指摘している。

政治家はもとより、知識人達も周辺国を対等の国と見なす態度をとらないことは、今に始まったことではなく、シナの伝統的思考方法なのである。だから、我々は、「そういうことなのだ」ということで対処したらよい。

不法入国者についても背景は少し異なるが東南アジア諸国への昔からの難民、清国太平天国の乱時の混乱から米大陸への大量難民など、今に始まったことではない。しかし、いずれの国でも人種摩擦を起し、現在に至っていることは知っておかねばならない。

また、新聞記者の不勉強に関しても、これも今に始まったことではない。内藤湖南は次のように指摘している。

「支那の国民の根本思想と、支那の目まぐるしい外形的変動とは大した関係はない」<sup>29)</sup>

「最近の支那に関する知識が多少普及する反比例に、その深さはむしろ減ってきたため、支那に関する批評については、かえって当局の支那人に巻き込まれ、冷静な批評の精神を失うことが多くなってきた」<sup>30)</sup>

「支那人自身も亦自国の学問をせず、自国の歴史も知らない少年が米国等にて教育されて帰り、直ちに支那を諸強国から解放して完全なる国家に

25) 「江戸期の開明思想」杉浦明平，別所興一，社会評論社 1990年 pp.190-203 (「斉彬公資料」)。

26) 「宮崎市定全集別巻」前出 pp.523-524。

27) *ibid.* , pp.523-524.

28) 「宮崎市定全集(16)」前出 p.520。

29) 「内藤湖南全集(8)」筑摩書房，1997年 pp.171-181 (「支那に還れ」)。

30) *ibid.* , pp.171-181.

為し得るなど自惚れたりする者があって、無経験の空論を盛んに高調し出している。これが日本の支那知識なき政論家や、軽薄且つ無識なる新聞記者等に著しく影響して支那に関する意見を支那人の意見に依って樹てる風が盛んになってきた。』<sup>31)</sup>

「支那は大体において守旧の国であるが、又時として非常に急進の国でもある。今の支那では立憲政治を一つの護符、大層結構なお守りのやうに考え、何でも立憲政治をやれば国が盛んになるように考えてゐる。昨年日本が朝鮮の併合を断行した時、支那の新聞は日本は立憲政治をやったので国が興った。朝鮮はそうでなかったのが亡んだ。こういう風に非常に簡単に一刀両断して判断していた」<sup>32)</sup>

「支那でやる立憲政治はどういうものであるか、支那人はさう細かい考へはない。独、英、日でも皆同じであると思つてゐる。日本が盛んになったのは昔からの由来がある。それは何かと云ふと中等階級の健全である、といったことがどうしても支那人には分らない」<sup>33)</sup>

「(支那の著名文化人)の意見は、単に西洋の政治組織を採用して支那で実施すれば、それによつてあらゆる改革がなし遂げられるという考へばかりで、支那といふ国家組織から新しく芽生えてくる新制度を創造する考へは毛頭なかった」<sup>34)</sup>

中国青年の自国の歴史を知らざること、日本の政論家や新聞記者の不勉強、中国人当局者に巻き込まれて冷静な批評精神がなくなっていること、立憲政治(社会主義政治や、解放経済政策)をとれば、全て解決するといった単純な考へ、中国人の日本の政治、経済体制への皮相な見方(日本の中産階級の健全さ、江戸期からの日本人の実証主義的思考の深まり、といった事を全く理解しようせず、単なる経済対策の良さで日本経済が20～

31) 「内藤湖南全集(5)」筑摩書房、1997年 pp.165-169 (「支那研究の変遷」)。

32) *ibid.*, p.411 (「支那論附属；清国の立憲政治」)。

33) *ibid.*, p.412.

34) 「内藤湖南全集(8)」前出 p.175 (「支那に還れ」)。



30年で急激に発展したと考える考え方等)は、当時も現在も全く同じであることを痛感する。

(3) 日本人はシナの伝統的思考、風習をあまりにも知らない

「大体日本の支那民族観というものに正反対の見方がある。支那人というものは少しの油断もならぬやつだ。ああいうやつは徹底的に膺懲するより外ないというが、他は支那人ほどいい民族はない。彼らは国家とか国法とかいうものから見れば実に雑駁なものかも知れんが、人間生活の上から見ると、これ位道義の厚い、嬉しいことの多いやつはないというように非常に褒める。それは純な気持ちで支那人に接した人に多い。だから何ということなくふらりと支那に遊んだ人は、後者の見方をする人が多い。これに反して、事業家には悪く解する方が多いのである」<sup>35)</sup>

これは昭和16年の安岡の言葉であるが、現在とあまりにも似ていることに驚く。勉強もせず、北京特派員となり、激しい利害対立の場に身を置くこともなく、気軽に表面的記事だけ書けば済む新聞記者は社会主義、共産主義信奉者ならずとも、中国びいきになるのだろう。

昔から文人墨客といわれるような学者、小説家、画家には支那びいきが多かった。

但し、安岡も指摘するように、ビジネスの世界でシナに進出した人々のシナ観がきわめて厳しいのは安岡がいうように昔も今も変わらないようだ。

それは、ビジネスへの態度が日本人と中国人との間には大きな差があるからと思われる。日本人は中国人が同じ黄色人種で顔も似ており、文字も同じであるから、いわゆる「同文同種」の幻想から日本式の「誠意を似て臨めば相手もそうなるだろう」とか、「信用に重きを置いて長期的利益を求めの方が結局は双方の利益になる」といった考えが通用するだろう、とついつい考え勝ちである。

35) 「この国を思う」安岡正篤、明德出版、1996年、p.150。

これに対してビジネスで中国人と接した人々は次のようなことを知る。中国人のビジネスとは権謀術数であり、騙される方が悪い、という考えである。しかも、自分の非は絶対に認めず、長期的信用を築こうとする考えはない。

短期的利益と金銭への執着はすさまじい。

シナの歴史は異民族からの侵略・支配と相つぐ革命による悲惨この上もない混乱の歴史である。こんな社会を何千年にも互って生き抜いてきたのが彼等だ。東海の孤島という、隔離された別天地で、異民族からの過酷な支配や、血で血を洗うような革命の悲惨さを経験したことの無い日本人は基本的人好しで、異民族を自分達の尺度で測ろうとする。

安岡は次のようになげく。

「今日なお日本人はシナを知らぬ、これは実に残念なことであります。私も幼少のみぎりから漢字で育ち、ずっとシナの興亡の歴史を学んで、多くの中国人と何十年付き合って往来してまいりました者から言いますと、今日の日本の指導階級、あるいは友好評論家階級ぐらいシナ中国を知らざること甚だしいものはない。知るといえども、浅薄であります。これは残念というよりも危険なことできえあります」<sup>36)</sup>

### (三) 日本人と中国人の相違

次の安岡の言葉は日本の政治家に向けた言葉であるが、事業人に向けた言葉と考えるもよからう。

「日本は生一本でのこのこ（中国へ）出かけて行って、まるで蝶が蜘蛛の巣にでも引っ掛かっているようになっておる、というのが実情であります。こういう老獪な国を相手にして両国間の関係を打開しようというのには、よほどこちらにも練達・老練でかつ見識、手腕、度胸を兼ね備えた人間でな

36) 「運命を創る」安岡正篤、プレジデント社、1985年、p.32。

いと勝負にならないのは明白であります。日本も少し善い意味で、すなわち老獪ではなく老練・練達の政治、また、そういう政略・政策が欲しいものであります」<sup>1)</sup>

古代シナの文化を研究するとか、古代シナの遺跡を訪問するとかいうのならばとにかく、中国において中国人を相手にビジネスをしようとするならば、彼等の特色を深く研究することが不可欠である。ビジネスにおいては利害がからんだ生の人間のぶつかりが必ず生じるからだ。ビジネスはマスコミの好む「日中友好のため」などという綺麗事ではない。

中国人をよく知るためにはどうすればよいか。それは、やはり生涯をかけてシナを研究した耆宿の教えを乞うことが一番だろう。

シナ学の大家といえは少し昔なら内藤湖南、最近なら宮崎市定がおり、浩瀚な全集がある。また、歴代首相の指南役を以て自らを任じていた安岡正篤も生涯をシナ研究に捧げた人である。

シナは絶えず周辺の異民族の侵略、征服を受けてきた。モンゴル人の征服(元)、ツングース系の女真族(満洲人)の征服(清)はシナ全土に及び、しかも200年、300年の長きに及んだ。これに伴う虐政や反乱、あるいはシナ民族間での易姓革命の連続は、陰謀、反乱、疫病、飢饉、天災地変といったあらゆる辛酸をシナ民族にもたらした。そういうものの中を苦しみ抜いて根強く、太々しく生きてきたシナ民族の性格や文化は非常に多面的で、矛盾に富み、軽率に決めてかかってはとんでもない錯誤に陥る、と安岡は注意する<sup>2)</sup>

「かかる歴史を生き抜いてきた彼等は必然的に謀略というものに大変長じてくる。惨憺たる歴史を経ただけに、奸悪というか奸佞というか油断も隙もない人物が多いし、老獪狡猾で、徹底して利己的、あらゆる忘思悖徳に平然としている。彼らは悲惨な歴史の中に育っただけに、国憲も、

1) 「人物を修める」前出, p.158.

2) 「天地有情」安岡正篤, 黎明書房 1988年, pp.263-266.

国法も、政府も、官僚も、地位も、閲歴も、世間的な何物も信ずることができない。畢竟、人間が信ぜられない。だから「人」べんに「為」すと書いて偽という字ができておる。さればこそ、世の中をわたるために徹底して保身の術に長け、臨機之才に富んでおる」<sup>3)</sup>

底に底がある、裏に裏をかくといった謀略はとても日本人の及ぶ所ではない。「韓非子」や「戦国策」を読むだけで厭な気分になる日本人は多い。安岡はいう。

「わが国ぐらい歴史的に恵まれた国はありません。こういう大陸と離れた島国でありますから、他の大陸諸国のように異民族から攻撃されたり、征服されたり、あるいはそれに抵抗して、反乱を起こすとか、革命をやるとかいうような惨憺たる悲劇を一向に経験することなく、建国以来、単一民族・単一言語の平和な一大家族的国体を持ち続けることができました。それは外に比べれば、本当に穏やかで平和な民族生活でした。その正反対がお隣りの中国です。中国という国は全く易姓革命の国家でありまして、夏、殷、周、秦、漢、晋、隋、唐、宋、元、明、清というように始終王朝の姓が変わっております」<sup>4)</sup>

四面海をめぐらす島国で、気候は温暖多雨、歴史的に万世一系の天皇を戴いて同一民族、同一言語、一度も外から侵略を受けることもなく、平和と統一に恵まれた歴史を持つ日本人は必然的にお人好しで単純である<sup>5)</sup>

安岡はシナと日本の国体、民族性の違いを「老」と「生」で現している<sup>6)</sup>。日本は生の文明、生の民族であるのに対して、向うは老の文明、老の民族である。老とは老練、老熟、悪くいえば老獐の老だ。これに対する生は、良い意味では生一本だが、悪くいえばなまで未熟である。生だから新鮮で刺激は強いが、それだけに角があって、熟達、練達していない。人間同士

3) *ibid.*, pp.263-266.

4) *ibid.*, p.22.

5) 「人物を修める」前出, pp.151-152.

6) *ibid.*, p.152.

のつき合いでも、日本人は嫌いな奴だとすぐ顔に出してそっぽを向く。

シナ人は老獺で、仲の悪い人間に対してはかえって慇懃丁寧である。これが日本人には分らない? 日本人は鋭角的、感情的で容易に激しやすく、沈みやすい<sup>8)</sup>

唐の太祖は唐朝建国の英雄である。歴朝の中でも最も偉大な天子といわれる。太祖とその臣である李靖とのやりとり「李衛公問対」という有名な兵書がある。この中で、太祖は「あらゆる兵書を勉強したが、要するに相手を詐をもって誤らしめる、あらゆる手段で陥れる、この一語で十分だ」といっている。太祖ともあろう人が堂々とこんなことをいう<sup>9)</sup>

毛沢東のやり方を見ても、太祖のいっていることと変らない。

中国人とビジネスのような利害を以て接する場合、このこと（謀略と権謀）を考えない日本人は忽ち、彼らの罠に陥ってしまう。単純で純心な日本人は到底老練、老獺な彼らの敵ではないのである。

中国人を相手にするには到底、生では太刀打ちできない。単純居士では翻弄されるだけである<sup>10)</sup>

深刻な政治戦、謀略戦に日本人は不得手で、とうてい老練、老獺な中国人の敵ではない<sup>11)</sup> 政治の世界だけでなくビジネスの世界でも然りである。

「笑中刀あり」「腹中毒あり」というのがシナでは当たり前である<sup>12)</sup>

「口蜜腹劔」とか「面従腹背」とかは単純な日本人には最も不得手だ。

日本とは対照的な民族性や社会道徳を作り上げているから、彼等を日本人的に考えると、しばしば誤る<sup>13)</sup>

安岡から見た田中角栄と毛沢東、大平正芳と周恩来にまつわるエピソード

7) *ibid.*, pp.152-154.

8) 「東洋学発掘」安岡正篤, 明德出版, 1986年 pp.20-21.

9) 「人物を修める」前出, pp.152-154, 「先哲講座」安岡正篤, 竹井出版 1988年, p. 259. 「太宗曰。朕觀千章大句。不出多方以誤之一句而已」

10) 「人物を修める」前出, p.27.

11) *ibid.*, p.154.

12) *ibid.*, p.153.

13) *ibid.*, p.24.

ドを書いて、いかに日本人が単純で、シナ人が老獪であるかの参考に供したい<sup>14)</sup>

シナには「指桑罵槐」という言葉がある。桑を指しているのだが、実は槐（えんじゅ）を罵っている、という意味だ。古来よりシナの詩や文章は、必ず別の、奥の意味がある。中国の指導者達の発言もそうだ。

日中国交回復時、時の田中角栄総理は毛沢東主席より「楚辞集註」という珍しい本をもらった。単純な田中はこれこそ日中友好の絆だといって喜び、得意になった。大平正芳外相は、周恩来首相から「言必信、行必果。（言は必ず信、行は必ず果）」と書いた色紙を貰った。終生シナ思想史、シナ人物史を研究し、歴代総理から師と仰がれてきた安岡正篤はこれを聞いて憤った。安岡はかねてより、「今日の日本の指導者階級、あるいは友好評論家階級ぐらいシナ中国を知らざること甚しいものはない」と憤慨していた。

安岡は田中と大平の話聞いて又か、と思った。膨大な書物の中から毛が何故「楚辞集註」を外国の宰相に送ったのか。毛は勿論、自分の行為がその後のシナ歴史に記録されることを念頭に置いている。シナの歴史では夷狄と平和を結ぼうとした者とか親しくした者は、ことごとく漢奸（売国奴）扱いにされてきた。また、最近では崇洋媚外（西洋や東洋；日本をあがめて外国に媚びる。中国では東洋とは日本を指す）と罵倒される。その上、毛には、戦後の復興が著るしく、大国化した日本に複雑な感情があった。「楚辞集註」とは、シナの戦国時代末期の楚地方の歌謡の註釈を集めたもので、屈原の話が中心である。屈原は楚の政治家で、西の大国秦に対抗するため周辺の小国で連合しようとし、うまくゆかず汨羅の淵に身を投げて死んだ人だ。安岡はいう。一国の長が外交の席で相手国の最高責任者に

14) 「安岡正篤とその弟子」安岡正篤、竹井出版、1984年、p.164、「昭和の教祖安岡正篤」塩田潮、文芸春秋社、1991年 pp.215-217、「安岡正篤の世界」神渡良平、同文館、1991年 PP pp.67-70、「安岡正篤先生動情記」林繁文、プレジデント社、1988年 pp.85-86。

贈呈するような本ではない。毛はこの本に託して、楚（日本）は確かに文化が高く、豊かであるが、しょせん小国であって、結局は西の大国秦（中国）に滅されるのですよ、と言外に言っているのだ、と安岡は指摘する。

周恩来の色紙もそうだ。言は必ず信頼できるもの、行は必ず果断にやる。その言葉に悪い所はないが、この言葉の出典は論語だ。

孔子が士人の、ランクづけを行っている所に書かれている。「言必信，行必果，硜硜然小人也，抑亦可以為次矣」とある。「言うことははっきりと偽りなく、行うことはきっと潔ぎよい。こちこちの小人だがね。でもまあ第三級の人物と評することがきよう」という意味である。第一級の人物は外国に出て、君命を損わない、第二級の人物は一族から孝行だといわれ、郷里からは悌順といわれる人だ。「言必信，行必果」は第三級の士人だと孔子はランクづけした。

周恩来は、大平を、「あなたはウソもいわない。行いもすっきりしている。がしょせん三流の人に過ぎませんね」と言外に嘲っているのである。恐らく後世のシナの史家は、周辺の野蛮国（日本）の宰相と大官にシナの皇帝と宰相が蔑んで下賜したものを、東夷の彼等は喜んで受け取ったと記すだろう。

#### (四) 中国の政治体制の特色

中国へ進出する企業担当者が戸惑うことの一つは関連役所の役人からのリベート欲求である。

これも、シナの歴史的伝統を知れば驚くことではない。

シナの政治制度や国民性を知るのに不可欠のことは、官吏登用試験制度である科挙制度である<sup>1)</sup>。科挙は隋の煬帝が大業2年(西暦606年。聖徳太子の時代)に始め、清朝末期の光緒30年(西暦1905年、明治38年)まで1300年間続けられてきた。

1) 「科挙」宮崎市定、中公新書、1990年を参考にした。

シナ人の心構えの基本は「大学」の中にある有名な文言の「修身，齊家，治国，平天下」である。身を修め，家を齊え，国（地方）を治め，天下（シナ文化圏）を平定する。

身を修め，家を齊えるだけでは駄目で，世に登用（官吏になる）されなければ自己を発揮できない。世に登用されるということは，科挙に合格することである。科挙に合格し役人になることによって国を治め，天下を平にすることができる。この意味で科挙に合格することはシナ的価値の最高善であった。

また，後述するように，シナでは古代より物的資産を築ける唯一の道は官吏になることだった。名誉と富を得るには官吏になる道しかなかった。このためには，どうしても難関中の難関の科挙の試験に合格しなければならない。

試験の内容は詩賦と策案（政治論文）であるが，儒教の古典（四書：論語，大学，中庸，孟子。五経：詩経，書経，易経，礼経，春秋。その他必読古典としての公羊伝，穀梁伝，周礼，爾雅等々）からの豊富な引用がなければ採点者は承知しない。答案を書く書体は館閣体という書体でなければならぬ<sup>2)</sup>

シナの読書人は全てこの科挙を目指して，幼時より猛勉強をした。五十歳で合格すれば若い方ともいわれた。シナの読書人は幼，少，青，壯の殆どの生涯を受験勉強のために館閣体の書を学び，古典の丸暗記に精力を消費した。彼らがそれ程までに科挙の合格に恋いこがれたのは何も役人の仕事をしたいためではないことは，受験生を発奪させるための有名な詩（科挙に合格すれば，土地も邸宅も，黄金も美女も自ら手に入るという内容）を読めばよく分る。

富家不用買良田（富豪となるには良田を買う必要はない），書中自有千鍾粟（必読の古典の中に千石もの粟があるのと同じだ）というこの詩の一部

2) 「館閣体」に関しては「書人外書伝」正田寛吉，読売新聞社，1983年，pp.114~119 参照。



から分るように、官吏となれば、富と名誉と美女が思うまま、というのがシナの歴史であった。「読書做官(本を読んで役人になる)」「昇官発財(役人になって財産を作る)」という言葉もある。

京都の藤井有隣館には、四書五経と注釈(70万字)がびっしりと毛筆で書き込まれた下着が展示されている。科挙の試験は独房式だから、この下着はカンニング下着なのだ。筆者はこれを見た時、シナ人の科挙への執念を見た思いがした。

内藤湖南は次のように指摘する。

「官吏の位置さえ得ると云ふと何人も亦、少なくとも貴族の生活をせぬ者はない。支那の知県は日本の郡長ぐらいの低い行政官であるが、それを三年もやれば、とにかく一家族が一生食ふだけのものができる。一般に地方官をした者の子孫で相当の財産を持っていない者はない」<sup>3)</sup> 「支那で財産の出来るという一つの要素は其一家族の中のある人が立派な官吏になることを以て最も重なるものとしてゐる。商人でも塩商などのような半官半民の関係のある者の他は如何なる商人でも官吏をする程大きな財産を作ると云ふことはできない」<sup>4)</sup>

「農民も日本の農民ほどの大きな財産を持ったものがない。つまり、あらゆる職業の中、官吏ほど産を積むに最も便利なものがない」<sup>5)</sup>

そうして内藤は次のようにいう。

「(清朝が亡んで新しい時代になっても、筆者注) 官吏となれば貴族生活を送るという考えが少しも払い去られない」<sup>6)</sup>

「支那の従来 of 官吏はあらゆる職業の中で最も割の良いものということを知っていたので、この考えを脱し得るや否やは疑わしい」<sup>7)</sup>

官吏が何故富を築くことができるのか。内藤は次のように指摘する。

3) 「内藤湖南全集(5)」筑摩書房、1997年「支那論(3)内政問題(1)」p.363。

4) *ibid.*, p.363.

5) *ibid.*, p.363.

6) *ibid.*, p.364.

7) *ibid.*, p.365.

「支那の官吏の収入の多すぎると云ふのは積年の弊であった」<sup>8)</sup>

「支那の如く数千年来政治上の弊害が重なって官吏と云ふ者には殆んど政治上の徳義が麻痺して、其弊害と云ふことも自覚しないやうになってゐる国」<sup>9)</sup>

シナの最小行政単位である県（日本でいうと郡）の長は知県といい科挙合格者でないとなれない。知県の下に随時の自分のスタッフとしての幕賓がおり、その下に下働きの胥吏がいる。

知県が三年毎の渡り者であるのに対し、この胥吏は世襲である<sup>10)</sup>

「渡り者官吏の常として、任期の間だけ首尾よく勤めればよく、人民のことなど念頭に置かない。徴税権を利用して金もうけをする。自分でやるには多少気がとがめるが、その間に胥吏とか幕賓のやうな便利な機関があつて、欲望を達するには都合のよい行政機関になってゐる」<sup>11)</sup>

知県以上の官吏は科挙に及第した者だ。

詩賦を作ったり策論の勉強はしているが、実際民政のことについては少しも研究しないし、その気もない。これが官吏になって少しもやっていない民政を扱わねばならぬとなるから（胥吏の作った書類の）盲判を押し。

実際の民政（徴税）を行うのは胥吏で、内藤によればこのシナの胥吏は日本の下級武士のような教育を受けておらず、士流としての品格を持っていない<sup>12)</sup>彼らは科挙及第の官吏からは賤民扱いされた下層書記である<sup>13)</sup>

知県（科挙及第の官吏）と胥吏の相違は、科挙及第の高級役人と宦官との関係と見ることもできる。

シナの歴史を知る上で宦官を抜きに考えることはできない。宮崎によれば、「宦官は殆んど全てが下層社会の出身だけに世故にたけ、読書階級の家

8) *ibid.*, p.359.

9) *ibid.*, p.360.

10) *ibid.*, p.359.

11) *ibid.*, p.367.

12) *ibid.*, pp.325-326.

13) 「宮崎市定全集(17)」岩波書店、1993年、p.266.

庭で飽食暖衣の恵まれた環境に育ち、ただまっしぐらに科挙の試験を唯一の目標として無益な学問競争に勝っただけの高級官僚と比べて実務の才に長じていることは同日の談でない。彼等は言わば廉恥の外におかれた利益追求の集団で、あらゆる知恵を絞って、その地位を利用して賄賂を貪るのを心掛けるのである」<sup>14)</sup>

科挙に及第した高級役人や胥吏や宦官といった人々の行動様式は長い伝統を持っているだけに現代中国においても、そう変わるはずがないと見ておくのが無難であろう。

宮崎は次のようにいう。

「前近代の中国においては役得は常識であり、表面は高貴な大臣、宰相と雖も、分相応な付け届けを受けることは半ば公認されている。ただ、それが余りに目立つ時に非難を受けることになる」<sup>15)</sup>

「由来、中国では政治家に対し、良いことをせよと要求するよりも、悪いことをするなという要求が強いのである」<sup>16)</sup>

日本の江戸時代は各藩とも、一般に人望もあり、廉潔で実務に堪能な下級武士をして地方行政に当らせた。そうでなければ藩の収入を増やすことはできず、百姓一揆でも起れば藩の重職は切腹はまぬがれぬし、悪くすれば藩のお取り潰しに遭うからである。地方行政に当った藩士が財を作った例はまず聞かない。

司馬遼太郎もシナの政治伝統を次のように描いている<sup>17)</sup>

「私である皇帝一人が、その手足となる官僚を採用した。優劣の選りわけは、作文によった(科挙の考試)。官僚が王朝という私権の執行者であるため、それぞれが私腹を肥やすことは、べつだん悪とされなかった。まれに清官がいたが『清官で三代』といわれた。子孫三代まで徒食できるという

14) 「宮崎市定全集(1)」岩波書店、1993年、p.368。

15) *ibid.*, p.368.

16) *ibid.*, p.400.

17) 「風塵抄(2)」司馬遼太郎 中央公論社、1996年 pp.146-147。

ことであった。

1911年、辛亥革命で清朝が倒れた。翌年元旦、アジアで最初の共和国である中華民国が成立したが、しかし、二千年来の思想的習俗は一朝で消えるものではなかった。

天下を得た毛沢東もまた、その晩年、『王朝は私』という伝統の病気からまぬがれなかった。現在のすべてが自分に気に入らぬとして、文化大革命という、中国のさまざまを玉石ともに砕くという巨大な政治的ヒステリーをおこした。」

さらに次のようにもいっている<sup>18)</sup>

「資本主義は、自律、自制、自浄がないと保たない。孫文も、そのことを憂えていた。官吏が私腹を肥やすことは清末まで諸王朝では当然、もしくはそれが在り方だったし、また歴世の庶民にとって王朝は“飢えた虎”といわれたように、本質として“私”だった。蒋介石氏が英雄であったことはいうまでもないにせよ、その“王朝”が伝統的な“私”であったことはまぎれもない」

#### (五) 備考 中国・支那の呼称について

中国という言葉はどういう意味を持っているのか。以下は主として高島俊男氏の論説を参考にして書く<sup>1)</sup>

中華人民共和国の代表的辞書「漢語大詞典」には次のような説明がある。

「上古時代、わが国の華夏族は黄河流域一帯に国を建てた。天下の中心にいたいと思ひ、中国と称した。そして周囲のそのほかの地区を四方と称した」

18) *ibid.*, pp.122-123.

1) 「『支那』は蔑称ではない」高島俊男

「諸君！」1994年12月号 pp.156-165.

「『中国』とはどんな意味か」高島俊男、「諸君！」1995年2月号, pp.168-176.

「中華帝国の解体」黄文雄, 亜紀書房, 1994年, pp.2-6.

四方とは有名は東夷、北狄、西戎、南蛮である。夷は野蛮人、狄は犬の一種、戎は猿の一種、蛮は動物の意がある。

古代から彼等は中国、中華、中夏（夏には大の意味もある）と自尊した。又彼らに顕著な意識は華夷思想である。文化の栄える自分達は華人と称し、四方の豺狼（山犬や狼）のような野蛮人を夷人と呼んだ。このようなことを知らない新聞記者は現在でも東南アジアの中国系住民を華人と書いている。この華人なる名称を使うと東南アジアの中国系住民以外は夷人と書かねばなるまい。

「中国」とはもともと中央なる我が国という自尊・自称であって、日本人が「中国」といえば、それは日本を指した。日本書紀の雄略天皇紀にも「中国」という言葉が出てくるが、この「中国」は日本を指した。

江戸時代に山鹿素行も「日本こそ中国である」とのテーマで「中朝事実」二冊を書き出版している<sup>2)</sup>

「本朝」「皇朝」「中朝」という言葉も同様である。清国人や明国人がこれを使うと、清や明を示し、日本人が使うとこれは日本になる。

中の者が「中国」といえば自尊の意の「我国」となり、外の者が中に向かって「中国」といえば自卑と強い敬意をこめた「貴国」ということとなる。

夷狄がいう際に自らを低文化の辺境種族と自認して中央の高みに向かって「中国」と称する。どちらが中央でもない対等の関係において一方が他方を「中国」と称することはあり得ない。

「支那」（この語源は後述する）という言葉をやめて「中国」を使えという人は、この語が持つ尊大な一面を知らないのではないかと高島は指摘する。

もともと、彼等には自らの民族、土地、国全体を呼ぶ語がない。夏、殷、周、秦、漢、晋、隋、唐、宋、元、明、清、中華民国、中華人民共和国と

2) 「日本人とは何か」山本七平、PHP研究所、1989年、p.259、「歴史に観る日本の行く末」小室直樹、青春出版社、1999年、p.112。

いう国名はあるが、これらは地域はカバーしていても時代的区切りがある。これら各時代を通じての総名がない。相手が臣下の礼をとってきた場合、自らを中央の高みに置いて、彼等は「中国（我国）」と称した。

さて、シナの語源であるが、1500年以上前、インドで現在の中華人民共和国の中心部あたりをシナとかシナスタンと呼んだのが起源のようである。スタンは土地とか地域の意味がある。パキスタン、アフガニスタン、トルキスタン、カザフスタンの如きである。英、独語のランド（例えばイングランド、アイルランド、ドイッチュランド）のようなものである。

このシナは最初の統一帝国である「秦」に由来するものであろうと多くの学者はいう。

このシナが西方に伝わって、ギリシャ語のシナイ、伊語のチナ、独語のヒナ、仏語のチン、英語のチャイナとなった。なお、筆者が留学生から聞いたところによると、マレー語ではシナ、バングラデシュ語ではチナというらしい。

四世紀以後、インドへ行って仏典を持ち帰り翻訳しようとしたシナの仏教徒はシナを、支那、至那、脂那、シナスタンを震旦、真丹、振旦、神丹等と訳した。いずれも美辞である。これらの言葉は彼等の国を通時的に称する名として便利であった。

日本に支那の語が入ってきたのは平安時代である。空海の詩に支那や平家物語に支那震旦の言葉があり、林羅山の詩にも支那の言がある。新井白石の有名な「西洋紀聞」にも「按ずるに其人（伊宣教師シドッチ）の言にチイナといふは即ち支那也」という記述もある。

シナ学の耆宿宮崎市定も次のように書いている。「戦後になって急に支那という言葉は日本人が創作した中国に対する侮蔑の詞だといって騒動にまでなった。支那という言葉は恐らく古代の秦王朝の秦が西方に伝わって中国を指す地名Sinとなり、仏教が中国に入ると、この語が逆輸入され、漢字で支那と写されることになった。故に中国の仏教徒は誰はばかりとくなく自国を支那と名乗って怪まない。

この文字は日本に輸入されてから年久しく、現在では立派な日本語の位置を獲得しているといつてよい。

古来、日本では中国を呼ぶに唐、明、清、と呼ぶとともに、通して支那の名によって、その土地をさした。イギリスを英国、アメリカを米国と呼ぶのと同じである。』<sup>3)</sup>

「この支那なる語はSin, Chinaと同源であり、世界的に最も広く行き互った言葉であり、その文字も古く、中国の仏教徒が自ら選んで使用した所である。然るに近時、ややもすれば支那とは近代日本人が殊更に中国を蔑視せんが為に発明した造語であるなどと、附会の説をなすに至っては、これは全く自らの無知を暴露するものに外ならぬ。』<sup>4)</sup>

「『支那』の文字の如きも、シナなる音は、Chinaと同じく世界共通の地名に外ならず。『支那』なる漢字はもと漢訳の仏典より出て、由緒正しき用法に従ったもの』<sup>5)</sup>

さて、英語でもシナ人、シナ語の意味で、シナ (Sino) という言葉を使う。シナ学をシナロジー (Sinology), シナ学者をシナローグ (Sinologue), 日清戦争をシナ・ジャパニーズ・ウォー (Sino-Japanese War) というのがその一例である。

支那という言葉が日本では真当な言葉として定着していたのは前述の宮崎の言でも明らかである。文豪魯迅も日本では自国を「支那」、自国人を「支那人」といった。清朝の打倒をめざした孫文ら革命派は「清」を使うのを潔しとせず「支那」を使った。(朝日新聞夕刊 1999年3月13日、『窓』の『孫文とシナ』)。

内藤湖南、吉川幸次郎、倉石武四郎、といったシナ学の大家も「支那」という言葉を使った。

3) 「宮崎市定全集(24), 随筆(下)」岩波書店 1993年, p.679.

4) *ibid.*, p.646.

5) *ibid.*, p.711.

日本では山陽道の安芸、備後、備中あたりを中国（地方）と戦国時代頃より称していたのも明らかである。

明治45年、中華民国が成立し、翌大正2年10月、日本など主要列強は中華民国を承認した。日本政府は中華民国なる言葉は使わず、英語のRepublic of Chinaを訳して支那共和国と呼んだ。中華というような自尊的な言葉を国号に定めるのは、他を蔑視するものだから、万国共通の「支那」という地名を用いるべきだ、というのがその理由であった<sup>6)</sup>。

我国を意味する美称としての「中国」をシナと同意義語として使う人が多くなったのは何時頃で、何故だろうか。

高島によれば、昭和21年6月に外務省から出された二通の通牒が原因だろうという。

一通は、総務局長名で都下の主な新聞雑誌社宛に出された「中華民国の呼称に関する件」である。内容は「支那という文字は中華民国が嫌うので使用をやめるよう要求があったので今後は使わぬようにしたい」というものだった。代替用語として、中華民国、中国、民国などがあげられた。但し、歴史的、地理的、学術的叙述についてはこの代替語に依り得ないので支那の言を使うこともやむを得ない、としていた。

もう一通は、外務次官名の「支那の呼称を避けることに関する件」と題する通牒で、新聞雑誌社に（前述の）総務局長名通牒を送ったので参考までに送付するとして、各省および地方官庁に送ったものである。

支那という言葉は自国人（仏教徒）が美辞を使用して千年以上も前に作ったもので、日本でもこの支那なる言葉を平安時代より使用している。中華民国が何故この言葉を嫌ったのかよく分らない。日本だけに要請（文書によるものか口頭によるものか不明）して、世界各国にチャイナ、ヒナ、

6) 「宮崎市定全集(16)近代」前出、pp.253-254。



チナ、シナ、チンの言葉を使用しないようにと要請はしていない。その理由も不明である。

日本政府がジャパン、ヤーパン、ハポンとは良しからず、須らくニッポンと称して欲しいと外国に要請したということや、ドイツがフランス政府にアルマーニュは良くないドイッチュランドにして欲しい、あるいは逆にフランスがドイツにフランクライヒは良くないフランスとして欲しいと要望したということも寡聞にして知らない。

三浦朱門は次のようにいっている。米国人が自国人をAmericanと発音したのを日本人はメリケンと聞き、メリケン粉とかメリケン人という言葉を作った。これにはあまり悪いニュアンスがない。

これに対して、中国人が自国人を「中国人」と発音（カナで強いて表せばチャンコーレン）したのを日本人はチャンコロと訛って聞いた。

これは明らかな蔑称となった。これは米国の「徳」の結果であろうか。（朝日新聞1996年7月14日。「中国・台湾とどう付き合うか。『中心になる国』の意識、惑わされずに根気よく」三浦朱門）

---

雑誌SAPIO (1999年4月28日, vol.11, No.7) の「支那を『支那』と呼んで何が差別なのか!」(呉 智英), も参考になる。